

デーヴォ ガイド



2022.6.13-19

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?) 1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?



2:1 この出来事の後、アハシュエロス王の憤りがおさまると、王は、ワシュティのこと、彼女のしたこと、また、彼女に対して決められたことを思い出した。

2:2 そのとき、王に仕える若い者たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを捜しましょう。」

2:3 王は、王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、シュシャンの城の婦人部屋に集めさせ、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧に必要な品々を彼女たちに与えるようにしてください。

2:4 そして、王のお心にかなうおとめをワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心になかったので、彼はそのようにした。

2:5 シュシャンの城にひとりのユダヤ人がいた。その名をモルデカイと言って、ベニヤミン人キシユの子シムイの子ヤイルの子であった。

2:6 このキシユは、バビロンの王ネブカデネザルが捕え移したユダの王エコヌヤといっしょに捕え移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕え移された者であった。

2:7 モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。このおとめは、姿も顔だちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。

2:8 王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くのおとめたちがシュシャンの城に集

められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エステルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。

2:9 このおとめは、ヘガイの心にかない、彼の好意を得た。そこで、彼は急いで化粧に必要な品々とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女にあてがった。そして、ヘガイは彼女とその侍女たちを、婦人部屋の最も良い所に移した。

2:10 エステルは自分の民族をも、自分の生まれをも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはならないと彼女に命じておいたからである。

2:11 モルデカイは毎日婦人部屋の庭の前を歩き回り、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。

王の家臣たちはワシュティが復権した場合の報復を恐れてか、早く次の王妃を決めるようにと画策します。王妃選びに時間がかからないように一般人から王妃を選ぶという、異例の方針を進言しますが、それでエステルにも機会がめぐってきました。その背後には当然主の御手が働いたのです。

その機会に主から用いられたのがモルデカイでありエステルです。モルデカイは「シュシャンの城に」とあるように、王に仕える官吏でした。捕囚の民という弱い立場にありながらも、努力と誠実で社会からも評価されていたのではないかと推察されます。また両親が亡くなった従姉妹エステルの親代わりとなったことから、もともと親族を助ける愛の持ち主であったことがわかります。

エステルも「ヘガイの心にかない、彼の好意を得た」とありますから、容姿だけではなく、その人柄も誰からも愛されるものだったのでしょう。このように、捕囚という過酷な身の上でありながらも、誠実にそして信仰で生きていくことによ

て、神様はそのような人を守り可能性を与えて、お用いになるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





2:12 おとめたちは、婦人の規則に従って、十二か月の期間が終わって後、ひとりずつ順番にアハシュエロス王のところに、はいつて行くことになっていた。これは、準備の期間が、六か月は没薬の油で、次の六か月は香料と婦人の化粧に必要な品々で化粧することで終わることになっていたからである。

2:13 このようにして、おとめが王のところにいつて行くとき、おとめの願うものはみな与えられ、それを持って婦人部屋から王宮に行くことができた。

2:14 おとめは夕方はいつて行き、朝になると、ほかの婦人部屋に帰っていた。そこは、そばめたちの監督官である王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王の気に入る、指名されるのであれば、二度と王のところには行けなかった。

2:15 さて、モルデカイが引き取って、自分の娘とした彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところにはいつて行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。

2:16 エステルがアハシュエロス王の王宮に召されたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。

2:17 王はほかのどの女たちよりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と恵みを受けた。こうして、王はついに王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。

2:18 それから、王はすべての首長と家臣たち

の大宴会、すなわち、エステルの宴会を催し、諸州には休日を与えて、王の勢力にふさわしい贈り物を配った。

2:19 娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門のところにすわっていた。

2:20 エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、まだ自分の生まれをも、自分の民族をも明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じように、彼の言いつけに従っていた。

2:21 そのころ、モルデカイが王の門のところにすわっていると、入口を守っていた王のふたりの宦官ビッグタンとテレシュが怒って、アハシュエロス王を殺そうとしていた。

2:22 このことがモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。

2:23 このことが追及されて、その事実が明らかになったので、彼らふたりは木にかけられた。このことは王の前で年代記の書に記録された。

王妃になるために他の「おとめ」たちは、この機会を逃さないようにと、最善のことをしました。「王のところに入って行くとき、…願うものはみな与えられ」たので、自分を魅力的に見せるために、最大限のものを用意したことでしょう。しかしエステルは、自分からは何も求めませんでした。見せかけのものは空しいと知っていたからか、または全てを神様に任せていたからでしょう。そして結局そのようなエステルこそが、「すべての者から好意を受け」たのです。ここに主に従って生きる女性の魅力があります。男性もまたそのような女性のすばらしさに気づくべきでしょう。

そしてそのようなエステルが「王の好意と恵み

を受けた」のです。そこでもエステルは「モルデカイに養育されていたときと同じ」く謙遜であり続けました。主はモルデカイに王を守るよう導きを与え、後に彼とエステルを用いられました。神を信じないこの世の中にあっても、信仰の徳を持ち続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





3:1 この出来事の後、アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。

3:2 それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうともしなかった。

3:3 王の門のところにいる王の家来たちはモルデカイに、「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか。」と言った。

3:4 彼らは、毎日そう言ったが、モルデカイが耳を貸さなかったので、モルデカイのこの態度が続けられてよいものかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。モルデカイは自分がユダヤ人であることを彼らに打ち明けていたからである。

3:5 ハマンはモルデカイが自分に対してひざもかがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされた。

3:6 ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。

3:7 アハシュエロス王の第十二年の第一の月、すなわちニサンの月に、日と月とを決めるためにハマンの前で、プル、すなわちくじが投げられ、くじは第十二の月、すなわちアダルの月に当たった。

3:8 ハマンはアハシュエロス王に言った。「あなたの王国のすべての州にいる諸民族の間に、散らされて離れ離れになっている一つの民族がいます。彼らの法令は、どの民族のものとも違っていて、彼らは王の法令を守っていません。それで、彼らをそのままにさせておくことは、王のためになりません。

3:9 もしも王さま、よろしければ、彼らを滅ぼすようにと書いてください。私はその仕事をする者たちに銀一万タラントを量って渡します。そうして、それを王の金庫に納めさせましょう。」

3:10 そこで、王は自分の手から指輪をはずして、アガグ人ハメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンに、それを渡した。

3:11 そして、王はハマンに言った。「その銀はあなたに授けよう。また、その民族もあなたの好きなようにしなさい。」

3:12 そこで、第一の月の十三日に、王の書記官が召集され、ハマンが、王の太守や、各州を治めている総督や、各民族の首長たちに命じたことが全部、各州にはその文字で、各民族にはそのことばで示された。それは、アハシュエロスの名で書かれ、王の指輪で印が押された。

3:13 書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。

3:14 各州に法令として発布される文書の写しが、この日の準備のために、すべての民族に公示された。

3:15 急使は王の命令によって急いで出て行った。この法令はシュシャンの城でも発布された。このとき、王とハマンは酒をくみかわしていたが、シュシャンの町は混乱に陥った。

ハマンはイスラエルの敵であるアマレクの子孫で、今ここで自分の傲慢さゆえにイスラエルを滅ぼそうとしました。モルデカイの態度が気に入らなかったのです。モルデカイが、彼の神以外のものを崇めなかったからです。

信仰を貫くことは、傲慢な人の反感を買うかもしれませんが、それは結果的には神様の勝利につながることで、後にハマンは滅び、イスラエルは守られるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





4:1 モルデカイは、なされたすべてのことを知った。すると、モルデカイは着物を引き裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、大声でひどくわめき叫びながら町の真中に出て行き、4:2 王の門の前まで来た。だれも荒布をまとったままでは、王の門にはいることができなかったからである。

4:3 王の命令とその法令が届いたどの州においても、ユダヤ人のうちに大きな悲しみと、断食と、泣き声と、嘆きとが起こり、多くの者は荒布を着て灰の上にすわった。

4:4 そのとき、エステルの侍女たちと、その宦官たちがはいて来て、彼女にこのことを告げたので、王妃はひどく悲しみ、モルデカイに着物を送って、それを着させ、荒布を脱がせようとしたが、彼はそれを受け取らなかった。

4:5 そこでエステルは、王の宦官のひとりで、王が彼女に仕えさせるために任命していたハタクを呼び寄せ、モルデカイのところへ行っ、これはどういうわけか、また何のためかと聞いて来るように命じた。

4:6 それで、ハタクは王の門の前の町の広場にいるモルデカイのところに出て行った。

4:7 モルデカイは自分の身に起こったことを全部、彼に告げ、ハマンがユダヤ人を滅ぼすために、王の金庫に納めると約束した正確な金額をも告げた。

4:8 モルデカイはまた、ユダヤ人を滅ぼすためにシュシャンで発布された法令の文書の写しをハタクに渡し、それをエステルに見せて、事情を知らせてくれと言い、また、彼女が王のところに行って、自分の民族のために王に

あわれみを求めるように彼女に言いつけてくれと頼んだ。

4:9 ハタクは帰って来て、モルデカイの伝言をエステルに伝えた。

4:10 するとエステルはハタクに命じて、モルデカイにこう伝えさせた。

4:11 「王の家臣も、王の諸州の民族もみな、男でも女でも、だれでも、召されないで内庭にはいり、王のところに行く者は死刑に処せられるという一つの法令があることを知っております。しかし、王がその者に金の笏を差し伸ばせば、その者は生きます。でも、私はこの三十日間、まだ、王のところへ行くようにと召されていません。」

4:12 彼がエステルのことばをモルデカイに伝えると、

4:13 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。

4:14 もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

4:15 エステルはモルデカイに返事を送って言った。

4:16 「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にま

す。」
4:17 そこで、モルデカイは出て行って、エステルが彼に命じたとおりにした。

エステルはモルデカイとのやりとりで、イスラエルの危機を知り、また自分の命をかけて王に嘆願することを決心しました。

「王宮にいるから…助かるだろうと考えてはならない」とは、主のみわざのためには皆が当事者であり責任者なのだということです。

「もしかすると、この時のためである」というのは、主に与えられた立場は、主のみこころを成すためだということです。命さえも主にお任せしたエステルのように、使命を果たしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





5:1 さて、三日目にエステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の内庭に立った。王は王室の入口の正面にある王宮の玉座にすわっていた。

5:2 王が、庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を受けたので、王は手に持っていた金の笏をエステルに差し伸ばした。そこで、エステルは近寄って、その笏の先にさわった。

5:3 王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何がほしいのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」

5:4 エステルは答えた。「もしも、王さまがよろしければ、きょう、私が王さまのために設ける宴会にハマンとごいっしょにお越しく下さい。」

5:5 すると、王は、「ハマンをせきたてて、エステルの言ったようにしよう。」と言った。王とハマンはエステルが設けた宴会に出た。

5:6 その酒宴の席上、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

5:7 エステルは答えて言った。「私が願い、望んでいることは、

5:8 もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしくて、私の願いをゆるし、私の望みをかなえていただけますなら、私が設ける宴会に、ハマンとごいっしょに、もう一度お越しく下さい。そうすれば、あす、私は王さまのおっしゃったとおりにいたします。」

5:9 ハマンはその日、喜び、上ぎげんで出て行った。ところが、ハマンは、王の門のと

ころにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、自分を少しも恐れていないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。

5:10 しかし、ハマンはがまんして家に帰り、人をやって、友人たちと妻ゼレシュを連れて来させた。

5:11 ハマンは自分の輝かしい富について、また、子どもが大ぜいいることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを全部彼らに話した。

5:12 そして、ハマンは言った。「しかも、王妃エステルは、王妃が設けた宴会に、私のほかはだれも王といっしょに来させなかった。あすもまた、私は王といっしょに王妃に招かれている。

5:13 しかし、私が、王の門のところすわっているあのユダヤ人モルデカイを見なければならぬ間は、これらのことはいっさい私のためにならない。」

5:14 すると、彼の妻ゼレシュとすべての友人たちは、彼に言った。「高さ五十キュビトの柱を立てさせ、あしたの朝、王に話して、モルデカイをそれにつけ、それから、王といっしょに喜んでその宴会において下さい。」この進言はハマンの気に入ったので、彼はその柱を立てさせた。

命をかけてのエステルの嘆願は王に受け入れられました。神様はエステルの信仰に答えてくださったのです。エステルはもともと神様に命さえも任せていたので、冷静な洞察と判断ができたのだと思われます。彼女は王の様子を見るため、またハマンを安心させるために、繰り返し酒宴を設けました。

ハマンは上機嫌で、さらに憎いモルデカイを殺すための木を立てますが、これは後に彼自身が架けられることになるのです。

欲や願望を主に委ねて、自分に死んだ人は、肝がすわり恐れないので、冷静な判断が出来るようになります。また敵が勝ち誇って自分を陥れようとするときにも、あせらずに主のときにお任せできるものです。主のために生きるならば、必ず主の勝利が与えられるので、大きく構えて主のみわざを見せていただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





6:1 その夜、王は眠れなかったので、記録の書、年代記を持って来るように命じ、王の前でそれを読ませた。

6:2 その中に、入口を守っていた王のふたりの宦官ピグタナとテレシュが、アハシュエロス王を殺そうとしていることをモルデカイが報告した、と書かれてあるのが見つかった。

6:3 そこで王は尋ねた。「このために、栄誉とか昇進とか、何かモルデカイにしたか。」王に仕える若い者たちは答えた。「彼には何もしていません。」

6:4 王は言った。「庭にいるのはだれか。」ちょうど、ハマーンが、モルデカイのために準備した柱に彼をかけることを王に上奏しようと、王宮の外庭にはいつて来たところであった。

6:5 王に仕える若い者たちは彼に言った。

「今、庭に立っているのはハマーンです。」王は言った。「ここに通せ。」

6:6 ハマーンがはいって来たので、王は彼に言った。「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよからう。」そのとき、ハマーンは心のうちで思った。「王が栄誉を与えたいと思われれる者は、私以外にだれがあるう。」

6:7 そこでハマーンは王に言った。「王が栄誉を与えたいと思われれる人のためには、

6:8 王が着ておられた王服を持って来させ、また、王の乗られた馬を、その頭に王冠をつけて引いて来させてください。

6:9 その王服と馬を、貴族である王の首長のひとりの人に渡し、王が栄誉を与えたいと思われれる人に王服を着させ、その人を馬に乗せて、町の広場に導かせ、その前で『王が栄誉

を与えたいと思われれる人はこのとおりである。』と、ふれさせてください。」

6:10 すると、王はハマーンに言った。「あなたが言ったとおりに、すぐ王服と馬を取って来て、王の門のところへすわっているユダヤ人モルデカイにそうしなさい。あなたの言ったことを一つもたがえてはならない。」

6:11 それで、ハマーンは王服と馬を取って来て、モルデカイに着せ、彼を馬に乗せて町の広場に導き、その前で「王が栄誉を与えたいと思われれる人はこのとおりである。」と叫んだ。

6:12 それからモルデカイは王の門に戻ったが、ハマーンは嘆いて、頭をおおい、急いで家に帰った。

6:13 そして、ハマーンは自分の身に起こった一部始終を妻ゼレシュとすべての友人たちに話した。すると、彼の知恵のある者たちと、妻ゼレシュは彼に言った。「あなたはモルデカイに負けかけておいでですが、このモルデカイが、ユダヤ民族のひとりであるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。きっと、あなたは彼に負けでしょう。」

6:14 彼らがまだハマーンと話しているうちに、王の宦官たちがやって来て、ハマーンを急がせ、エステルの設けた宴会に連れて行った。

主がどのように社会や歴史に介入なさるのが、表されているのがこのエステル記です。これを読んでわかるように、一見王や有力な家臣たちが全てを動かしているようですが、実は見えないうちで全能の主が働いて、そのみこころをなされるのです。

そこでは王が眠れないことも、栄誉を手に入れたと高ぶっている有力者の勝ち誇った計画も、主の御手の中にあるのです。

ただ、かつて自分の上げた功績に対して「栄誉とか昇進とか」もなかったことに、不平不満を言わなかった、信仰の人モルデカイのためには、主は良いもので報いてくださいました。主に信頼して、みこころと共に歩みましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



7:1 王とハマンはやって来て、王妃エステルと酒をくみかわした。

7:2 この酒宴の二日目にもまた、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

7:3 王妃エステルは答えて言った。「もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。」

7:4 私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、殺害され、滅ぼされることになっています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたでしょうに。事実、その迫害者は王の損失を償うことができないのです。」

7:5 アハシュエロス王は王妃エステルに尋ねて言った。「そんなことをあえてしようとたくらんでいる者は、いったいだれか。どこにいるのか。」

7:6 エステルは答えた。「その迫害する者、その敵は、この悪いハマンです。」ハマンは王と王妃の前で震え上がった。

7:7 王は憤って酒宴の席を立て、宮殿の園に出て行った。ハマンは王妃エステルにいのち請いをしようとして、居残った。王が彼にわざわざを下す決心をしたのがわかったからである。

7:8 王が宮殿の園から酒宴の広間に戻って来ると、エステルのいた長いすの上にハマンがひれ伏していたので、王は言った。「私の前

で、この家の中で、王妃に乱暴しようとするのか。」このことばが王の口から出るやいなや、ハマンの顔はおおわれた。

7:9 そのとき、王の前にいた宦官のひとりハルボナが言った。「ちょうど、王に良い知らせを告げたモルデカイのために、ハマンが用意した高さ五十キュビトの柱がハマンの家に立っています。」すると王は命じた。「彼をそれにかけてよ。」

7:10 こうしてハマンは、モルデカイのために準備しておいた柱にかけられた。それで王の憤りはおさまった。

エステルには思慮深い考えがあり、王の関心と慈しみを引き出すがために、王と何度も会いながらもなかなかその本題は明かしませんでした。その間にハマンはモルデカイを殺す計画を立てていたのですから、一步遅くなればエステルの引き伸ばしは大失敗になるところでした。この一連の出来事を勝利に導かれたのは、神以外にはありません。

結局誰も先のことを見越して行動できる者はなく、ただ主のみ旨に叶う者が、主からの勝利をいただけるのです。それは主ご自身が勝利者であるからで、主のみこころにつく者が勝利にあずかれるのです。

またエステルは、神の時を知り、勇気を出して王に同胞への助けを求めました。ハマンがモルデカイを殺そうとしていることは知りませんでした。主のみこころを行ったときに、自分が知らない問題にも解決が与えられたのです。

ハマンは人を陥れようとした異に自分がかかりました。箴言に「(26:27) 穴を掘る者は、自分がその穴に陥り、石をころがす者は、自分の上をそれをころがす。」とあるとおりです。

小さなものであっても、誰かを害するような穴や石を用意するようなことをせず、主のために自

分を犠牲にする勇気と決心に生きることを、喜びとしましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

